

聖霊降臨後第23主日（10月23日の聖書箇所）

I 第一朗読（エレミヤ14章7―10節・19―22節）

- 7 我々の罪が我々自身を告発しています。  
主よ、御名にふさわしく行ってください。  
我々の背信は大きく  
あなたに対して罪を犯しました。
- 8 イスラエルの希望、苦難のときの救い主よ。  
なぜあなたは、この地に身を寄せている人  
宿を求める旅人のようにになっておられるのか。  
9 なぜあなたは、とまどい  
人を救いえない勇士のようになっておられるのか。  
主よ、あなたは我々の中におられます。  
我々は御名によって呼ばれています。  
我々を見捨てないでください。

10 主はこの民についてこう言われる。「彼らはさまようことを好み、足を慎もうとしない。」主は彼らを喜ばれず、今や、その罪に御心を留め、咎を罰せられる。

- 19 あなたはユダを退けられたのか。  
シオンをいとわれるのか。  
なぜ、我々を打ち、いやしてはくださらないのか。  
平和を望んでも、幸いはなく  
いやしのときを望んでも、見よ、恐怖のみ。
- 20 主よ、我々は自分たちの背きと  
先祖の罪を知っています。  
あなたに対して、我々は過ちを犯しました。
- 21 我々を見捨てないでください。  
あなたの栄光の座を軽んじないでください。  
御名にふさわしく、我々と結んだ契約を心に留め  
それを破らないでください。
- 22 国々の空しい神々の中に  
雨を降らしうるものがあるでしょうか。  
天が雨を与えるでしょうか。  
我々の神、主よ。  
それをなしうるのはあなただけではありませんか。  
我々はあなたを待ち望みます。  
あなたこそ、すべてを成し遂げる方です

II 第二朗読（テモテへの手紙IIの4章6―8、16―18節）

6 わたし自身は、既にいけにえとして献げられています。世を去る時が近づきました。7 わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。8 今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。

16 わたしの最初の弁明のときには、だれも助けてくれず、皆わたしを見捨てました。彼らにその責めが負わされませんように。17 しかし、わたしを通して福音がたまなく宣べ伝えられ、すべての民族がそれを聞くようになるために、主はわたしのそばにいて、力づけてくださいました。そして、わたしは獅子の口から救われました。18 主はわたしをすべての悪い業から助け出し、天にある御自分の国へ救い入れてくださいます。主に栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

#### 言葉の解説

6節 ■「いけにえとして献げられています」。直訳は「注がれている」。この動詞スペンドーは「お神酒を捧げる」ことを意味するが、転義して、「人が自分の血をいけにえとして流す」を意味する。ユダヤ人は、殉教者の死はいけにえとして価値があると信じていた。これはその影響を受けた隠喩である。パウロの全生涯はいけにえであり、今や血を注ぐという段階が残されているのみ。この手紙は死を目の前にしたパウロがテモテに残した遺訓という形式をとっている。 ■「世を去る時」。直訳は「私の出発の時」。「出発」は「死」を表す隠喩であり、この背景には、いかりを解く船乗り、テントを引き払う兵士のイメージがある。7節の「戦い」との関連を考えると、兵士のイメージが強いかもしれない。

16節 ■「だれも助けてくれず」。直訳は「誰も私のために傍らに立たなかった」。著者の孤独が強調されている(115)。「伝統的な解釈では、この手紙の著者はパウロであり、すでに一度ローマで監禁され(使二八16、20)、釈放されたのち、今また獄中からこの手紙を書いていると見る。しかし、現在ではこの手紙はパウロの思想を受け継ぐ者によって書かれているとする説が有力である。

17節 ■「主はわたしのそばにいて」。16節の「私のために傍らに立たなかった」者と「わたしのそばにいて」主が対比される。

18節 ■「悪い業」。一般的な「悪」ではなく、パウロの宣教活動を妨害しようとする働きを指す。 ■「助け出し」。17節の「救われました」と同じ動詞リュオマイ。過去に神の救いを体験したことが未来の救いの確かさを確信させる。

①「テモテへの手紙 II」は、パウロがテモテに残した遺訓という形をとっている。まもなく死を迎えようとしているパウロが、宣教者としての生涯を振り返り、静かにその心情を語る。6-7節を直訳すると、次のようになります。

私は既に注がれている(現在)

私の出発の時は来ている(完了)

立派な戦いを私は戦った(完了)

行路を私は終えた(完了)

信仰を私は守った(完了)

「既に注がれている」は、パウロの全生涯がいけにえとしてささげられたものであり、今や血を注ぐという段階が残されているだけだという事実を指している。彼は「立派な戦いを戦い」、「出発(死)の時」は差し迫っている。パウロは生きている限り福音宣教のために戦わねばならなかった。しかし、今「行路を終えた」彼は、「信仰を守った」と心安らかに述べる事ができる。なぜなら、彼にはやるべき仕事を果たし終えたという満足感があるからだ。

このパウロの満足感と平安は、「義の栄冠を受ける」という確信に支えられている。8節に「今や、義の栄冠を受けるばかりです。…わたしに授けてくださるのです」とあるが、これを直訳すると、

今や私に義の冠が取っておかれてある

主が、正しい審判者が、かの日に私に報いるだろうところの(義の冠)

となる。「義の冠」はパウロのために残してあるのだから、それはパウロに渡されるべきもの

である。「報いる」と訳した語には「戻す、(与えるべきものを)与える」という意味がある。パウロのものである「義の冠」は保管されており、主は終わりの日にそれを「与えるべきもの」として「彼に与える」。「正しい審判者である主」が「与えるべきもの」として与える」のだから、終わりの日には「義の冠」にふさわしいか否かの審査が行われる。しかし、パウロは不安を抱いたり、ひるんだりする必要はない。なぜなら、彼は「立派な戦いを戦い、行路を終え、信仰を守った」からである。ここでの「義」とは神が人間に要求する生き方だが、パウロはそれを生涯をかけて貫き通した。こうして義を全うしたパウロは、永遠の命という栄冠を受け取る。

16節では、過去に裁判にかけられたとき「だれも助けてくれず」、孤独であったことが思い起こされている。人はだれもパウロのために弁明しなかったが、「主はわたしのそばにいて」くれた(17節)。この部分を直訳すると、次のようになる。

私のために誰も傍らに立たなかつた

だが、主が私のそばに立った

パウロを助けず、見捨てた人々とは「彼の傍らに立たなかつた」人々である。しかし、主は「彼のそばに立ち」、力づけた。パウロを通して「福音があまねく宣べ伝えられ、すべての民族がそれを聞くようになるために」力を現したのは主である。立派に戦い、走りとおし、信仰を守り抜いたのはパウロであり、そこには彼の努力と熱意があつた。しかし、パウロを支え、福音宣教を推し進め続けたのは「主」であつた。だれ一人彼の傍らに立つ者がいないときにも、「主はそばにいて、力づけ」、獅子の口からも救い出した(17節)。過去に「救われた」という体験があるからこそ、未来にも「主が助け出す」という確信をもてる(18節)。

パウロが心静かに死の時を迎えることができるのは、やるべきことを果たしたという満足感と、どんな時にも、たとえ死の時にも「主がそばにいて、力づけてくださる」という確信があるからだ。

## ②言葉の広がり。「授ける・アポデイドーミ」。

この動詞は接頭辞アポ(から)と動詞デイドーミ(与える)からなる合成動詞であり、まず、「引き渡す、差し出す、支払う」を意味する。ぶどう園の主人は労働者たちに賃金を「払い」(マタ二〇8)、ピラトはイエスの遺体を「渡す」ように命じた(マタ二七58)。

次に、「返す、戻す」の意味で用いられる。イエスは子供をいやして父親に「返し」(ルカ九42)、ザアカイは不正に取り立てた税金があれば、四倍にして「返す」と約束した(ルカ一九8)。

さらに、良い意味でも悪い意味でも「報いる」を意味する。隠れたことを見ている神は「報いてくださる」から(マタ六4)、悪に悪を「返さず」にすることができ(ロマ二一17)。

また、中動態では「売る、手放す」も意味する。族長たちはヨセフをエジプトへ「売り」(使七9)、エサウは長子の権利を「譲り渡しました」(ヘブ二16)。

今日の朗読では、「授ける」と訳されているが、ここには「返す」という意味も響いている。主は、パウロだけでなく主を信じるすべての者に取り置かれた義の栄冠を返す日を待っている。

## Ⅲ福音(ルカ18章9—14節)

9 自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。10 「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。11 ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。12 わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』13 ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようとせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪

人のわたしを憐れんでください。』<sup>14</sup> 言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

#### 言葉の解説

9節 ■「人々」。イエスは不特定多数の人々に向けて語っている。ここではイエスの弟子だけでなく、より広範囲のキリスト者・読者も視野に入っている。

10節 ■「ファリサイ派」。ユダヤ教宗派の一つ。この名前は「分離する」を意味するヘブライ語パーラシュに由来し、「汚れから分離された者」の意味だと言われる。当時のユダヤ社会は、律法が想定している社会とは隔たりが生じ、その間隙をどのように埋めるかが課題であった。サドカイ派はこの隔たりには目を向けず富と政治権力に没頭していた。エッセネ派はこの隔たりを認め、自分たちの生活様式を過去の時代の単純明解なものに戻そうとして荒れ野での隠遁生活に入った。これに対してファリサイ派は、彼らの解釈活動によって古い律法を新しい生活形態に適合させようとしていた。彼らが特に重視していたのは、日常の食生活における聖潔規定、十分の一税、安息日規定の厳格な遵守などである。

11節 ■「奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者」。十戒の三つの掟「姦淫するな、盗むな、偽証するな」に関連する。「不正な者」とは特に人をだます者で、徴税人はその代表と考えられた。

12節 ■「断食」。律法によって規定されている公の断食は、年一回贖罪の日だけである(レビ一六29)。しかし、ファリサイ派の人々は、モーセがシナイ山に登った木曜日と下山した月曜日に断食を実行したらしい。■「全収入の十分の一」。ファリサイ派は律法に規定のない農作物についても十分の一を献げていた(マタ二三23、ルカ一一42参照)。

①イエスはこのたとえを「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」に向かつて語っている。11節のファリサイ派の祈りの中に「不正な者」という言葉があることから考えると、これは彼らのことを念頭に置いた表現だと言えるが、ルカはそれを明らかにしていない。自分の正しさに自信を持つあまり、周りの人を取るに足らないと見なす人は、いつの時代にも、どこにも存在する。私たち自身もそのようになってしまふ危険性を持っている。このたとえは、これを読む読者一人ひとりに向けて語られているのだろう。

このたとえには、神に祈りをささげるために神殿にやってきた二人の人物が登場する。その二人の「たたずまい」と祈りの言葉は実に対照的である。神殿の境内に入り、「異邦人の庭」を通り抜けると、一人の人は、至聖所のある本殿の前まで進み、人目につく所に立って「神様、感謝します」と祈り始める。彼は立ったまま祈りをささげたが、それはユダヤ人が祈りをささげる時の普通の動作である。そのときと彼の目も天に向かって上げられていたと思われる。彼は十戒のすべてをきちんと守っていたので、自分は「奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者」ではない、と述べ、さらに「この徴税人のような者でもない」と言い添える。彼がそう付け加えたのは、自分は掟を厳密に守らずに汚れたままの状態で祈る人とは違うという自負心からだろう。彼はさらに、週に二度も断食していること、また獲得したもの「すべて」について十分の一税を払っていることを加え、自分の正しさを神に訴える。

当時のユダヤ教では、週に二度の断食は必ずしも義務ではなかったし、獲得したもの「すべて」について十分の一を納める必要もなかった。彼のこの祈りの内容からうかがえるのは、彼は実際に熱心なユダヤ教信者であり、自分に忠実であろうとしているということだ。そればかりか、彼は「守るべき掟」以上のことを実践している。彼の正しさは救いのために充分すぎるほどであり、自分は「正しい者だ」と自信を持つのも当然である。

神殿に上ったもう一人は徴税人であった。彼は、本殿からは離れて「遠くに立って」いる。彼は神殿の「ユダヤ人の庭」と「異邦人の庭」の境界あたりにたたずんだままそこから先に進もうとせず、自分の犯した悪を恥じて、目を天に上げることもできなかった。彼は胸を打っ

て自分の弱さを悲しむ。彼は「神よ、わたしを憐れんでください、御慈悲をもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐってください」という詩編51の冒頭を思い起こさせる言葉を用いているが、「わたし」ではなく、「罪人のわたしを」と述べている。

ファリサイ派は自分の正しさを神に「感謝」し、徴税人は自分の罪深さを悲しんで神の「情け」を乞い求めた。ファリサイ派は神の前に正しい者となるために、十戒を守り、週に二度断食し、すべての収入について十分の一税を納めてきた。しかし、神の目に「義とされて」、自分の生活に戻ったのは徴税人のほうであった。

ファリサイ派の人は神に「感謝」したが、それは自分がいかに正しく生活しているかということに片寄っていた。彼が表明したのは、自分自身に対する信頼であり、「自分自身を高くする」生き方である。そのような生き方は神の目に義とされない。

人間は弱い存在だが、ファリサイ派の人は努力によってそれを克服しようとした。しかし、徴税人は弱さを神の憐れみに出会うための開きとした。義人ではなく、罪びとを招くために来られた方は、徴税人こそ神の前に正しい人だと教える。

## ②言葉の広がり。「うぬぼれる・ペイソー」

この動詞は、まず「説得する、納得させる」を意味する。パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の「説得に努め」たが（使一八4）、「説き伏せた」と非難されることもあった（使一九26）。このように、「言いくるめる」という悪い意味が込められることもあり、また、「取り入る」（使二二20）、「なだめる」という意味で「うまく説得する」という用例も見られる（マタ二八14）。

次に、完了と過去完了で用いられると「信頼する、確信する」を意味する。パウロはファイルモンが頼みを聞き入れてくれると「信じて」おり（フィレ21）、善い業を始めた方がそれを完成すると「確信している」（フィリ一6）。

今日の朗読でイエスは、自分は正しい人間だと「うぬぼれて」いる人々を非難している。彼らは自分を「信頼して」、他人を見下している。彼らの過ちを明らかにし、人が真に信頼すべきものを示すために、イエスは神に「頼って」（マタ二七43）、十字架に上った。

